

【論 説】

メンガー経済学の世界 (2)

山 崎 弘 之

目 次

- 1 メンガー家の環境
- 2 メンガーの経済学への執念と使命
- 3 メンガーの真の継承者はミーゼスとハイエク
- 4 ウィーンにおかれた限界原理
- 5 メンガーとの間に距離のあったウィーザー
- 6 メンガー経済学の核心とは
- 7 メンガーが描く価値そして財の世界
- 8 経済学におけるミクロとマクロ
- 9 経済学における科学性とは

1 メンガー家の環境

まず、何故にオーストリア、ウィーン大学に、そしてカール・メンガー (Menger, Carl 1840-1921) に限界効用学派が生起したのであろうか、そして何故メンガーに他の学派とは著しく異なる、哲学を担わざるを得ない経済学が生起したのか、その一端をメンガーの兄弟に当てて見てみよう。

メンガーの学的環境、メンガーの家系や家族からみる。これについてもハイエクが明らかにしてくれている¹⁾。メンガーは1840年法律家の次男として現在のポーランド、ガリチア地方ノイ・ザンテツに生まれた。兄弟に長兄にマックス (Max)、弟にアントン (Anton) がいる。アントンはウィーン大学法学部を卒業し、カールの同僚教授となって社会主義に関する業績を残している。その業績の一つにかの有名な『労働全収権史論』がある。しかしながら、この著作は当時のウィーン大学を占めていたマルクス主義経済学

者とは一線を画しているのである。『ウィーン精神』の著者・ジョンストン (W.M. Johnston) は述べている。「(アントン)メンガーは労働者階級こそもっとも優れたモラルの持ち主であると考えていた。かれらは所有欲の渦巻く資本主義社会のなかに取り残された、工業化される以前の時代の高潔な精神の持ち主なのだ…。」(カッコ内は筆者)²⁾ ジョンストンは続ける、「オーストリア社会主義の最大の欠陥は、社会主義でありながら大衆の惨状を無視したことである。」³⁾ 社会主義者(マルクス主義者)に傾倒する学者や社会民主党員は残念ながら民衆から乖離していたのである。それに挑戦するかのように『労働全収権史論』は書かれたのである。ウィーン大学の社会主義者たちとは一線を画し、労働者階級の立場を強く擁護するアントンであったと。彼はおそらく孤高の社会主義者であったに違いない。ちょうどイギリスの経済学者・マーシャル (Marshall, Alfred 1842-1924) と同じように労働者に味方した、アントンであったと言えよう。もとよりアントンのみならずカールにも人道主義、個人主義そして自由主義を感じ取ることができるからである⁴⁾。換言すれば、メンガー家には理論のための理論ではなく、真摯に客観、真理を求める強い意志そしてリアリズムを感じ取ることができる。メンガーの経済学もその根底には強いリアリズムをおいたと言えよう。

長兄・マックスは国会議員になり、社会問題に寄稿する著述家となった。マックスはカールとアントンに助けられたようである。このいきさつについてジョンストンは述べている、帝国議会の議員を30年勤められたのもカールとアントンの援助なしにはあり得なかったと⁵⁾。ということは、マックスも2人の兄弟に同調した、人道主義、個人主義そしてリアリズムに生きた果敢な議員であったと思われる。議員は二人の学者と異なって実践を余儀なくされる。その実践者が二人の学者兄弟に支えられたと言うことは、二人のプレーンに支えられ、学者と実践家がついになってオーストリアの国家社会に貢献したと言うことができよう。

こうして見ると、メンガー兄弟たちは政治問題、社会問題そして経済問題を共通項として生きてきた。いわば、メンガー家は互いに経済や政治の問題

を議論する社会科学の環境をもっていた、と言えよう。カールは1859年から60年にウィーン大学で、1860年から63年にかけてプラグ大学で学び、さらにクラクフ大学で学位(法学博士)をとった。なぜ大学をはしごしているのかは分からないが、おそらく若いときから既成の枠に囚われない自由な立場、それを支える学問に対する情熱の人一倍強い性格が反映したのではないだろうか。その学問への真摯な取り組みは学生時代に既に萌芽していたと見られる。そして一時期ジャーナリズムに身を投じたり、オーストリア内閣の官吏となり、経済問題にも寄稿している。それはすぐには大学教授職に就けなかったことを意味するが、見方を変えれば、そこから経済学への執念と果敢な挑戦をかいま見ることができる。

2 メンガーの経済学への執念と使命

そもそもメンガーがウィーン大学の専任講師になるには困難があった。この時代、まず私講師から始めなければならなかった。その受講生の評判は当時のウィーン大学ではよくなかった。理由は明らかである。ウィーン大学もドイツ経済学の影響下にあったからである。今でこそ有名な『国民経済学原理』(以下『原理』1871年)であるが、当時のドイツ経済学界での評価はそれほどのもではなかった。ドイツ歴史学派の影響が学生にも浸透していたのであろう。次節で述べるように、メンガーの経済学の貢献者と言われ、そして限界効用学派を代表するベーム・バヴェルクとウィーザーは最初はメンガーに学ばず、ドイツ歴史学派を学んでいるといった具合である。

ドイツ歴史学派がもっていた歴史主義すなわち実証主義や帰納法が一般的であって、正反対の演繹的な方法は当時のウィーンでも受け入れられなかったのであろう。ドイツ哲学なら当然堅持していた演繹的手法はドイツ歴史学派の経済学には通じなかったのである。哲学と経済学との間の希薄な結びつきを感じざるを得ない。近世哲学を知るならば、ここに不自然さを感じるのは筆者だけではないはずである。メンガーがどの哲学者からこの演繹

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

的手法を経済学に援用したかは分からない。ジョンストンに言わせれば、その根拠を得ることはできないが、おそらくカント哲学の継承者、ヘルバルト (Herbart, J.F. 1776-1841) であろうと言う。確かにメンガー経済学に貫かれている演繹的手法とその科学性はヘルバルトに通じるのである。もとより、その相違がメンガーとシュモラーとの方法論の対決 (『社会科学, とりわけ政治経済学の方法に関する研究』 (以下『経済学の方法』1883年)⁶⁾ となったことは周知の通りである。

現代経済学においても共通する傾向を思わざるを得ない。経済学は自然科学に似せて対象化が可能な経験主義, 実証主義そして帰納法の流れが主流である。つまり経済学も自然科学とまったく同様に, 経験科学もしくは実証科学としてのみ理解するということが経済学者大方の立場である。当時の歴史学派もこの傾向が幅をきかせていた。経済学がもつ宿命を感じないわけにはいかない。いわば経済学が自然科学性と同様に扱われ, その結果エンジニアリングの域を出ないのである。いやもともと経済学はこの域に閉じ込められる学問ではなかったのである。スミスの経済学はその視点から経済を問うたのである。しかし経済学が専門性を進むに従い, その本来の姿はほぼ完全に失われてしまった。メンガー経済学はその復古であり, 本来の経済学を取り戻す努力であった。この復古は経済学への執念から挑戦となって現れたのである。もとより, メンガーの革新的な理論が即市民権をもつことは無理であった。現代の経済学界を見ても同様である。経済学者は自然科学的手法に酔いしれている。言うならば, メンガーの果敢な挑戦は今も続けられてしかるべきであると言わざるを得ない。

メンガーは最初はジャーナリストに身を投じるのであるが, まもなく官吏職 (内閣新聞局) が用意された。この間経済学の涉猟は熱心に続けられた。その結実が1871年『原理』の出版となったことは周知の通りである。この著作によって, 1872年ウィーン大学の経済学講座の私的講師に途が開かれた。同時に私講師とは無関係ではなからう, 1876年ルドルフ皇太子の教育係に任命され, 77年から78年の2年間皇太子の研究旅行に同伴する。そし

て帰国後の1879年ようやくウィーン大学正教授になった。

同時に次のようなことも言えよう。荣誉ある官職がメンガーに用意されていたにもかかわらず、それを棄てて学問の道を選んだメンガーの経済学への執念はひとかどならぬものであったことが窺える。しかしそれだけではない、メンガーはウィーン大学を定年まで務めることなく、1903年に辞するのである。もちろん、経済学をあきらめたのではない、逆である。自らの構想に基づく経済学を打ち立てるがために教授職を辞任する顛末であった。この経済学への強い情熱と執念のために教授職を辞する。メンガーの経済学への思いは地位や経済的支えをも棄てるほどのものであった。この経済学への強烈な情熱と執念をわれわれは心に止めておかねばならない。その思いは経済をリアリズムに見つめる意思と深く、強く結びついていたとすることができる。

どのようにして経済学への強い執念がメンガーに育まれたのであろうか。なかなか難しいところである。しかしながら、メンガーをとまりく環境、すなわち(既述の)メンガー家そして当時のウィーン大学の経済学的环境、オーストリアの社会的環境を渉猟するとその一端が連続的に見えてくる。

まず、メンガーを取り巻く経済学的环境は既述のように、ドイツの歴史学派の影響が強く及んでいた。それは官房学派、国家経済学であった。好むと好まざるに拘わらず、メンガーが生きてきた環境はドイツ歴史学派であった。いわば、ドイツ歴史学派経済学がメンガーの経済学の教師であったのである。もとよりドイツ歴史学派をまず学ばざるを得ず、その批判的摂取の中にメンガーは育まれたのである。この批判的摂取の対象としてのドイツ歴史学派なくしてメンガー経済学はなかったと言えよう。そこにメンガー経済学は構築されたのである。メンガーは『経済学の方法』の序言で述べている。「政治経済学もまたドイツ精神の目的を自覚した協力をかくことはできない。ドイツ精神を正しい軌道につれ戻すために貢献すること、これが本書がひたすら追求する課題であった。」⁷⁾では、ドイツ精神とは何か、そして経済学におけるドイツ精神とはどのような展開が可能となるのであろうか。もとより、ヘルバルト哲学の継承が展開されると言っても過言ではないだろう。しかしメ

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

ンガーには過去が見えにくいのである

メンガーが経済学を涉猟する中にその一端が窺える。演繹と言えども経済学をドイツ歴史学派のように国家経済学に固めて出発することはできない相談である。これは演繹的手法の誤解を解く鍵になるところである。経済学を「閉じられた集合」におくのではなく、「開かれた集合」におくことであった。演繹は「開かれた集合」で展開される。メンガーは生前 *Gruundsätze der Volkswirtschaftslehre* (『原理』) の第2版の出版を決して許さなかった。しかし息子・Karl は父親 (Carl) の死後、遺志に反して第2版を出版した。そこで登場したのがメンガー自身のメモである、すなわちタイトルが ~~Volkswirtschaftslehre~~ となっているメモである。Volks の部分を横線で消している。これには「国民」から「一般理論」へ、つまり経済学の普遍性を含意する新たな意図を感じざるをえない⁸⁾。メンガーが掲げる経済学の使命は官房学や国家学にあるのではなく、自由なそして個人に基づく、人間への福祉や調和⁹⁾の建設という地平を感じ取ることができよう。メンガーは『経済学の方法』で述べている。

「理論経済学は国民経済現象の『法則』ばかりでなく、その『一般的
な本質』をもわれわれに明らかにしなければならない。たとえば、財、
価値およびそれらの現象となるさまざまな形態の、経済、価格、地代、
資本利子、企業者利潤、貨幣などの法則をわれわれに明らかにするだろ
うが、それらの本質をあきらかにしないだろうように、この学問の説明
はなんとでも不完全なものとなさなければなるまい。したがって、『国民
経済の諸法則についての学問』としての理論経済学の定義は(まして
政治経済学一般の定義は)なんとでも狭すぎる。』¹⁰⁾

こうしてメンガーに抱かれた経済学の課題は射程の長いそして裾野の広い
課題を背負った立場からの出発であった。読書家のメンガーならその想像が
つくところである。そのような背景を見るにつけ経済学は即果実が表れるよ
うな代物ではなく、一生をかけた難工事ということである。その自覚からそ
れ相当の執拗な心構えそして強い意志が要請されると言うことは、当然の帰

結である。経済現象は所詮人間が創り出したものである。進んで、人間の存在は共同存在である。そしてスミスのような視野の広い経済学が再度日の目を見るのである。

メンガーの『経済学の方法』は古代哲学者・アリストテレスからの引用が最多であった。それは人間の共同存在論に言及せずして、経済を議論できなかった理由である。換言すれば、主観の世界と経験の世界をどのようにして統合されているのが課題となる。その難攻不落の城にも似た学問の一つが経済学であったことは百も承知である。経済学はスミスが苦勞したように、哲学という分野からの応援無くしては解決がつかないものであろう。それをしっかりと承知していたのもメンガーである。単に射程の長いそして裾野の広い分野に目を向けるというのではなく、万学の母としてそして根源学としての哲学に向かわざるを得なかったことは想像に難くない。それには強靱なそして不屈の執念が要請されていた。

では、哲学に戻って（もしくは援用して）社会科学の世界、経済学が解決に向かうのか。そう簡単ではない。なぜなら、形而上学のアプローチは異なる意見が出てきたときにその実証性を見だし得ない袋小路に入ってしまうことが多い¹¹⁾。主観に根ざした形而上学と経験とがどのような結びつきにあるのが要請される。この難しさが横たわる。メンガーが『原理』の2版を予告しながら、それを成就できなかったのはその理由からであろう¹²⁾。もちろん、この視点はまた自然科学の手法に身を委ねる恐れもないことはない。この途を開くことができずに悩んだのもメンガーの心境であったに違いない。

3 メンガーの真の継承者はミーゼスとハイエク

前節のように経済学を広くそして根源的なスタンスで見つめたとき、メンガーを引き継いだ真の継承者は誰なのであろうか。通常メンガーの継承者と言えば、4人の継承者ベーム・バヴェルクとウィーザーそしてミーゼスとハ

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

イェクである。しかしながら、前者の二人と後者二人の間にはある距離がある。山田雄三は述べている。

「とにかく彼(メンガー)は枝を上げ葉を繁らせるよりはむしろ根を深く掘り下げようとする性格をもっていた。メンガーの業績は彼の二人の後継者、ボエーム・バヴェルクとヴィーザーとを通じてポピュラライズされ宣伝されたが、それは間接であって、彼自身は普及ということにさほど関心をもたなかったし、彼の理論自体も著しく内攻的なものであった。私はこれを哲学的・根源的な性格と呼びたいのである…。」(括弧内は筆者、訳者に従って Wieser, F.F. をヴィーザーとした)¹³⁾

周知のように、前二者はいわゆる経済学プロパーの人であった。しかしながら、メンガーが意図した経済学はポピュラライズされた経済学ではなく、あくまでも普遍的なそして根源的な経済学であった。限界効用学派として名声を高めたのも、ウィーザーである。メンガーの最終効用を「限界効用」と際立たせたのはウィーザーであった¹⁴⁾。しかしその意義はオーストリア学派経済学をそして限界効用を際立たせることだけでは事が済まないのは明らかである。そして決定的な違いは、ウィーザーはハチソン(Hutchison, T.W.)が指摘するように、メンガーの方法論は古典派に陥った個人主義と理解して懐疑的であったことがあげられる¹⁵⁾。

その点で前二者はメンガーとはある隔たりを感じざるを得ない。ハイェクはゼミ教師・ウィーザーにある距離を感じて述べている。「私はヴィーザーのゼミしか知りません。それは理論的観点からは興味深いものでしたが、興奮させるようなものは何もありませんでした。」¹⁶⁾ 後者二人は哲学的かつ社会的に視野をもった経済学者であった。したがって、メンガーが目指した、もしくは目論んだ壮大な体系ある経済学に挑んだのはミーゼスとハイェクである。

リアリズムに立つ経済学はまず、経済は人間が営むものであるという基本的スタンスに立たねばならない。これと対極にあるのが自然科学である。自然科学は物を対象化して進められる。しかしながら、経済学はその論法では

絶対に進まない。しかしながら、メンガーの『原理』を巡ってさらなる展開には二手に分かれる途が用意されてしまったのである。

一方ではバーム・バヴェルクとウィーザーである。彼らはいわゆる経済学プロパーと言われている財や価格論を専らとする分野で継承してきた人々である。彼らの影響下からクヌート・ヴィクセル (Wicksell, J.G.K.) や Morgenstern (Morgenstern, O.) を生み出した。特に後者は数理経済学を信奉した。彼らは科学性においてはメンガーに通じるものがあるが、数学を手段とすることにおいてメンガーの立場からは大きく離れることとなる。もとより、メンガー自身にも科学性を説明するに自然科学的な方法ともとれる発言が散見されることも事実である¹⁷⁾。その故あって数学を援用する立場の人々が現れざるを得なかった。

他方では経済学プロパーにも視点をもち議論を進め、なおかつ社会学的かつ哲学的なアプローチに徹して進んでいったのがミーゼス、ハイエクであった。このような分裂した流れをメンガーは予期しなかったであろうし、望まなかったであろう。塘茂樹が言うように、これまでの経済学者は『原理』は二つの分断され採り上げられてきた¹⁸⁾。この流れは止めねばならない。現代経済学者の多くがメンガーをいわゆる経済学プロパーにとどめて議論する傾向が未だに強いことを憂える。メンガー経済学の正当性はミーゼスやハイエクが採り上げたスタンス、つまり社会学的かつ哲学的背景を極めるべく進められる経済学でなければならないと確信している。それだけメンガーの経済学には壮大な背景が控えている。それはリアリズムの現実をどのように整理するかという立場にかかっている。

バーム・バヴェルクとウィーザーは厳密に言えば、メンガーの直弟子ではなかった。彼らは最初ドイツ歴史学派に傾倒していたのである。彼らはウィーンを去って、ドイツ旧歴史学派のリーダー達、クニース、ロツシャー、ヒルデブラントのゼミに参加していたのである。しかしハイエクに言わせると、ウィーンの影響を持つ彼らは理論の上で実るものはなかったと言う。当然のこと、メンガーはドイツ歴史学派に批判的理論を持って臨んでいたからであ

る。彼らがそれに目覚めることに多くの時間を必要とはしなかったと。逆説的ではあるが、反対派の理論を学ぶことによってかえってメンガーの方法論の正しさを知ることになったことは想像に難くない。その焦点はどこにあったのであろうか。

まず、限界効用という、交換経済の原点、価値論の原点に焦点を当てて経済学を展開させたのは彼らであった。直弟子ではなかった2人をもって、ウィーン大学に限界効用学派、(シュンペーターがいみじくも述べたように)方法論的個人主義という経済学が開花したことも事実である。メンガーをもって限界理論経済学の一つを形成してきたのも彼らによるのである。しかし彼らの展開してきた経済学が真にメンガーが望んでいた経済学であろうか。それにはなほ疑問を持つのがこの論考の一つである。バームやウィーザーが掲げる経済学は数学的方法が採られているものの方法論は論じられてはいない。メンガーが求める経済学には方法論が不可欠であった。そこにミーゼスやハイエクの方法論に照明が当てられる理由があった。メンガーのリアリズムの経済学には哲学的考察が不可欠である。

しかしながら、それと裏腹にメンガー自身納得した経済学を構築し得たかと言えば決してそうではなかった¹⁹⁾。『原理』の第2版(メンガー・ジュニアが編纂する『一般理論経済学』、以下『理論』とする)を自ら予期していたものの、出版を見ることなくこの世を去った。その困難な道筋にあったメンガーではあるが、経済学への強い意志と執念は終生衰えることはなかった²⁰⁾。この困難さを思えば、型どおりの経済学にメンガーを入れることはできないのである。

もとより、著名な学者にしてはあまりにも少ない著作に終わったが、それは彼の目論んだ経済学は困難を極めたからである。経済の何たるか、方法論の何たるか、この二つ課題に応える凝縮された著作はたった二つである。換言すれば、経済学いわゆる(型どおりの)経済学に終わらず、地平の経済学へ導いたと言えよう。それはメンガーを引き継いだミーゼスやハイエクを見れば明らかである。

リアリズムの一端は労働価値説を批判したバーム・バヴェルクの価値論にも表れている。古典派経済学が気づいたように、あらゆる商品が労働から作り出されることもまた自明である。その意味で価値に対して、労働が果たす役割を否定する人はいない。古典派経済学の理論的支柱は労働価値説であった。しかし、商品価値は生産者の視点だけで具体化しないこともまた自明である。価値を起こすのは市場でもある。価値はあらかじめ設定されるのではなく、その時間その場によって生起するのである。いわば、価値は原因説では解決がつかないことを教えている。その意味で、価値を起こす原因説、つまり労働価値説は非現実的であった²¹⁾。財の価値(効用)はまずは第一義的に消費者の消費におかれねばならない。労働価値説を克服したのは消費者に視点をおく限界効用説であった。あらためて市場経済に論点が大きく向けられたと言える。それは単なる経験主義ではなく、リアリズムに徹した立場からの経済学であった。イギリス正統学派が陥っていた経験主義、原因説を払拭したと言えよう。主観、限界効用から客観、市場に深く分け入ったのはオーストリア学派であった。

では、メンガーを象徴する思想原理は演繹的論法、リアリズムにおける科学主義そして個人主義であったが、これらと『原理』に展開される限界効用はどのような結びつきを読み取ることができるのであろうか。まずメンガーの限界効用で知り得るところを述べてみよう。

4 ウィーンにおかれた限界原理

まず、経済学の一応の理解によれば、限界革命と言われる経済学者は周知のように、オーストリアのメンガー (C. Menger)、イギリスのジェヴォンズ (W.S. Jevons) そしてフランスのワルラス (L. Walras) である²²⁾。そして、経済学に画期的な革命をもたらしたのは彼らであって、彼らをして限界理論を分析的、方法論的に体系化した人という。

しかしながら、他方で経済学の教科書は、限界効用を説明するのに必ず

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

やゴッセン (Gossen, 1810-1858) を提示して説明する。限界効用逓減の法則をゴッセンの第一法則、限界効用均等の法則をゴッセンの第二法則として既に市民権を得ている。そしてさらに、周知のように限界効用²³⁾に最初に気づいたのはチューネン (Thunen, J.H. 1783-1850)、クールノー (Cournot, A.A. 1801-1877)、ゴッセンを挙げている。はたまた限界革命の先行者として、ロイド (Lloyd, W.F. 1863-1945)、ロングフィールド (Longfield, S.M. 1802-1884)、シーニア (Senior, N.W. 1790-1864)、デュピュイ (Dupuit, A.J.É.J. 1804-1866) そしてゴッセンが挙げられている²⁴⁾。では、その限界原理や限界革命の核になる経済学者は誰なのであろうか。そして、その限界革命の核になる理論はどのように捉えればよいのであろうか。まず、ここに挙げた経済学者群はほぼ同時代の人々である。一世代上の人といえばチューネンとシーニアである。時系列で言えば、彼ら二人が限界効用理論の発火点であった。しかしその継承と経緯をつぶさに見ることは现阶段で筆者には不可能である。

通説に目を転じよう。いわゆる限界理論はほぼ同時 1870 年代に 3 人の経済学者によって唱えられたと言われている。時期的な一致とは言え、彼らは独自に気付いたという。奇異な感じがしないでもない。しかし科学の世界には他にも見られる。ケインズをかくも有名にしたのは『一般理論』(1936年)である。しかし『一般理論』の核心部分を含む理論もまたほぼ同時期に展開されていたことは今ではよく知られていることである。1937年にC. フェール (C. Foehl) が『経済循環の貨幣的構造』²⁵⁾を上梓していたし、またM. カレツキ (M. Kalecki) は1933年に『景気循環理論の研究』²⁶⁾を上梓していた。これらはまさに独自に展開されていた。そして後者は『一般理論』に先駆けていたのである。

同時に同じ理論や発見は社会科学のみならず自然科学でもよくあった。その当時の世界文明の程度と言おうか、科学水準の程度と言おうか、しばしば知るところである。例えば、ビタミンの発見 (1911年) である。日本人の鈴木梅太郎が名付けたオリザニン (ビタミンの類) よく挙げられる。時期的

には早かったのであろうが、タッチの差で遅れた、もしくは日本語で発表したせいか分からない。オリザニンの名は市民権を得ることにはならなかった。日本人としては大変残念であるが、ビタミンの名付け親、カジミール・フンクに譲った。もとより、社会科学においては課題が絞られることはないが、同時であることにおいて限界効用の発見も似ている。それを潮時と言おうが、必然的と言おうがよい。おそらく、科学水準や思想の潮時があったのであろう。

科学も思想も新しい革命が生起するにはそれなりの理由がある。その潮時を限界革命に求めてみよう。もとより、メンガー、ジェヴオンズ、ワルラスそれぞれに異なる理由があるであろう。これらを彼らに照らして極めることは大変難しい。ここではメンガーを中心にその理由を探ってみよう。

しかしながら、なぜメンガー、ジェヴオンズ、ワルラスのトリオに限界革命者として命名するのであろうか。確かにチューネン、クールノー、ゴッセンらに学派が発生することはなかった。メンガー、ジェヴオンズ、ワルラスには限界原理をもって体系を見ることができる。そして彼らには学派が発生していた。もとより、その点でジョヴオンズに学派が発生したとは言えまい。この点でも理由根拠が薄弱である。ただ体系化において彼らが優れていたと見ることは正しいであろう（しかしこの言説もまた筆者には誠に心許無い。全てに目を通してはいるわけではないからである）。

その体系は三者に共有されているものではない。ワルラスとメンガーとを比較すると、彼らに共有されているものは個人に核をおく需要の原理である。しかし前者には市場が語られているが、メンガーにはまことに希薄である。またジェヴオンズやワルラスが数学を駆使して体系を整えたが、メンガーはこれを心底嫌った。したがって、彼らの何を以て限界革命のトリオと称するのかは明確ではない。限界革命としての共有点が見いだせないのである。おそらく、次のようにまとめられるであろう。①経済理論の基点を消費者の効用においたこと、②労働価値説の困難を確実にクリアーしたこと、③消費者の極大満足の原理を描くことができたこと等である。もとより、これらは学

派を引き継ぐ人たちによって述べられたことをも含む。それだけに限界革命は曖昧である。いわば時代の潮時、つまり多少なりとも時代の必然性を感じざるを得ない。したがって、メンガーに力点をおく筆者にとってメンガーを限界効用だけで終わらしてはならないのである。否、誤解を恐れずに言えば、メンガーは経済学の意義を限界効用理論にのみおくことはなかった、と見えてくる。

最近分かったことであるが、メンガーの孫・イブ・メンガー (Menger, E.) がデューク大学図書館に寄贈した「メンガー文庫」を見ると、チューネンを含む多くの抜粋ノートを作っていたとのことである²⁷⁾。このことから、限界効用は彼らからの援用であったということである。そうすると、限界効用はメンガーの思想原理に適った法則であった、同時にそれが意味することは彼の『原理』の材料に過ぎないのではなかろうか。したがって、メンガーは限界効用と命名することにそれほどの意義を認めなかったと思われる。極論すれば、彼の思想原理にゴッセンやチューネンの限界効用を組み込んだだけのこと。メンガーが目指した経済学はあくまでも全体論としての演繹論であり、そこで展開される福祉や調和の経済の構築にあったと思われる。限界効用は演繹や全体論に立つメンガー思想の手段であった。その理由はジョンストンの巧みな次の説明で明らかである。

「メンガーはまた、マッハの思惟経済の原則にも親近感を寄せていた。最小限の仮説で現象を説明しようと努めた点ではメンガーもマッハも同じだが、メンガーの方が理論それ自体にずっと強い敬意を払っていた。オーストリアでは、社会理論の分野のなかでも限界経済学ほど、仮説的推論の立場をとる人たちを惹きつけたものは他にはなかった。」(筆者修正訳)²⁸⁾

マッハの「思惟経済」や「最小の仮説」とは演繹論を意味する、換言すれば、それは全体論を展開することを意味する。全体論は国家や社会で括られる官僚経済学が身近に存在する。だが、これがそのままなら全体主義に陥るであろう。この官僚主義経済学の例はウィーン大学を代表する、経済学者(社会

学者、哲学者)の一人、シュパン (Spann, O. 1878-1950) に見ることができる。マルクス経済学華やかかなりしころ、ウィーン学派経済学が誤解を受けたところはそこにある²⁹⁾。しかし、メンガーはその誤解を『経済学の方法』で完全に払拭したことは今では明らかである。経済学はそのような「閉じられた集合」におかれてはならない。どこまでもヒュームやカントが主導した「開かれた集合」におかれねばならない。

要は、このような演繹もしくは官僚国家において限界効用は都合のよい、今で言うミクロ的手段であった。なぜなら限界効用は経験的だが、それは確固たる測定を不可能にし個人の需求 (メンガーの需要の代替語) を支える要素でありつつも、おかれた環境で一期一会で定まらない。経験論やリアリズムに魅力的であるが把握を許さない科学性である。見える全体論 (国家社会の経済) を理論的に支える見えない要素である。

ジョンストンは当時のウィーンの経済学者を「官僚としての経済学者」として括っている。国家経済を護っていくということこそが政治家や学者の仕事である、という思想が支配していたことも事実である³⁰⁾。国家は経済を従えるという構図である。換言すれば、国家や社会は一つの秩序や調和を創り出しているという演繹の構図を見ることができる。この演繹は学的広さをもってウィーン大学の思想を彩ることとなる。この構図は政治学的には官僚主義、思想としては「思惟経済の原則」となる。その現れがマッハである。マッハは哲学と名付けられることを好まず、心理学を好んだのもその現れである。そのマッハ思想は経験を大事にしながらも、「自我という仮説をたてるのは意味がない…意識は秩序だって連続的に流れる感覚のことであり、回想は過去の感覚の復活である。」³¹⁾として一元論を展開した。ウィーン大学は形而上学を敵に回す実証主義に彩られた。ここにカトリシズムとの融合が生じ、演繹論の下地ができていたように思われる。自我の滅却は簡潔に社会や国家に組み込まれる要点となる。

しかし、漸次国家主義 (もしくは国家社会主義) の誤りに気づいたのがメンガーである。それはドイツ歴史学派への批判として開花する。限界効用は

仮説とリアリズムとの間で揺られざるを得なかった。哲学的に言えば、主観と経験である。メンガーは終始この課題に答えを出そうとして孤軍奮闘した。これは次の迷えるウィーザーからウィーン的苦闘が見えてくる。

5 メンガーとの間に距離があったウィーザー

既述のように、オーストリア学派経済学の立役者はウィーザーとベーム・バヴェルクである。しかしながら、それはあくまでもいわゆる経済学プロパーでのことである。メンガーが立ち上げようとした経済学とは乖離していたと言わざるを得ない。後者ベームは学者として活躍したものの役人であったために学者期間は短かった。そして、彼の理論（利子論、資本理論）は決して完成されたものではなかった³²⁾。もとより、筆者はベームの経済学への貢献を無視するものではない。ヴィクセルによる累積的過程やミーゼスによる貨幣的景気循環論そしてマルクスの労働価値説への批判はベームがそれらの基礎を築いたものである。しかし、ベームにはメンガーが求めていた理論の根底、社会学や哲学が決定的に欠けていたと言わざるを得ない。

またベームはウィーザーの妹と結婚することとなり、ウィーザーとのつながりは密接なものとなった。それだけにベームの理論はウィーザーとの関係で展開されることは想像に難くない。彼らは確かにオーストリア学派、いわゆる限界効用学派の経済学をポピュライズしたことは間違いないが、メンガー経済学の芯を外していたと言わざるを得ない。

まずウィーザーによる限界効用学派の成立を見ることにしよう。既述のように限界効用に気づいていた学者は既に多く存在していた。にも拘わらず、限界革命はメンガーとワルラスに焦点が当てられる（ジェボンズも限界革命に入れられる。しかし彼は若くして亡くなったこともあって学派を形成することはなかったので除かれよう）。それは彼らが学派を形成の一員となったからである。

その理由をまずメンガーに焦点をあてて述べることにしよう。それはメン

ガー自身の問題ではなく、広くはオーストリアにおかれた、もしくはメンガー(1840-1921年)におかれた学的环境を見る必要がある。

既述のように、オーストリア学派経済学は演繹論もしくは全体論を不可欠としていた。それはドイツ歴史学派の影響からもたらされたものである。しかしその演繹や全体論の括りが国家経済学とならざるを得なかった。なぜなら、現に国家が政治的にも経済的にも秩序や調和を経験的に創り出していたからである。しかし国家と経済をあるがままに一体化させていいのかという疑問が生じる。この疑問に挑戦したのがメンガーである。

しかしここに岐路が生起する。演繹としての全体論は国家におくのか、それとも国家とは切り離して経済(調和や秩序)におくのかという岐路である。ジョンストンは前者に限って官僚主義として一つにした。ジョンストンは後者を見逃している。メンガーはあくまでも国家とは切り離すべく調和や秩序(具体的には福祉)を目指したのである。演繹は経済におかれねばならない。それには個人主義、そして「開かれた集合」や自由主義が要請される。このメンガーの経済演繹論に乗れなかったのがバームそしてウィーザーであった。バームは官僚主義の経済学に留まったし、ウィーザーは社会主義に向かった。

しかしながら、限界効用に焦点を当てたいわゆる経済学プロパーへの貢献は彼らに負うものである。これはメンガーが限界効用を取り立てることなく援用したのに対して、ウィーザーは取り立てて「限界効用(Grenznutzen)」³³⁾や「帰属の理論」として顕わにしたのである。もとより彼の貢献が無意味だということではない。演繹の構図を国家におき、それを無条件に経済学プロパーに収めたのである。したがってウィーザーはメンガーの個人主義は古典派経済学に帰るものであるとしたのである³⁴⁾。それ故彼はメンガーの方法論について懐疑的であったのである。

ウィーザーはメンガーの『原理』を読んでいるが、メンガーの講義には出席していなかった。確かに、ウィーザーが就職した大学は1883年ウィーン大学で講師に一時任じられるが、1884年ドイツ系のプラハ大学助教授に移

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

り、その後1903年メンガーの後任としてウィーン大学に任ぜられている。ドイツの歴史学派の影響を受けその中から抜けきらなかった一端が窺える。ハイエクは述べている。ウィーザーが歴史学派クニースの指導の下で書いた論文でメンガー理論に関連する部分にメンガーはほとんど関心を示さなかった、と³⁵⁾。いわば、ウィーザーはメンガーの方法論を理解していなかったと言えよう。

ジョンストンはこれらの経緯を次のように述べている。

「メンガーの個別主義とは対照的に、ヴィーザーが好んだのは、十八世紀の官房学派の伝統に立つ社会経済学であった。マックス・ウェーバーの依頼を受けて『社会主義の理論 (Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft)』(テュービンゲン, 1914)を書いたヴィーザーは、その中で、限界経済学とはリカードの自由主義的な古典学派のイデオロギーと社会主義のイデオロギーとの中間を行く道であると述べている。政治権力を獲得するために経済理論を利用する人々に抵抗して、ヴィーザーは混合経済を提唱したのである。」³⁶⁾

これから分かるようにメンガーが目指した経済学とは距離がある。演繹に立つ起点を国家においていたウィーザーと純粹に経済においていたメンガーとは一見して開きがないように見えるが、これは大変な開きであると言わざるを得ない。ジョンストンは続ける。

「ヴィーザーは、シュンペーターやオーストリア派マルクス主義者たちと同様、正確な知識に加えて広い視野を合わせ持っていたので、経済学を社会学や政治学と結びつけることができた。オーストリアの経済学者たちのなかで自分に考えが一番よく似ているのがヴィーザーだ、とシュンペーターは言っている。」³⁷⁾

シュンペーターはウィーン大学を出ているが、社会主義に接近していった人である。その意味においてメンガーから見ると、ウィーザーが迷える経済学者ならシュンペーターも迷える経済学者であったと言わざるを得ない。確かにウィーン大学は幅の広さをもつ学徒、経済学者を育んだ。しかし、そ

の行き着く起点が経済学の領域に留まれば、社会主義や官僚主義にならざるを得ない。この岐路にあってメンガーは視点を純粹に経済にのみおいていた。ウィーザーはメンガーとはそもそも最初から距離があった。言うまでもなく、メンガー経済学の継承者はミーゼスとハイエクである。

6 メンガー経済学の核心とは

ハイエクはメンガー全集の緒言・『カール・メンガー』で次のように述べている。メンガーの『原理』は「近代経済学の基礎を築いたすべての著作のなかでも、卓越した特徴を示している…。おそらくこれにかんして、近代の諸学派の相対的長所を評価するのにもっとも適した学者であるクヌート・ヴィクセル (K. Wicksell) による評価を引用しておくのがふさわしいだろう。彼 (ヴィクセル) は異なる学派の学説の最良の部分を選びつけた、最初の、かつもっとも成功した研究者である。」(かっこ内筆者)³⁸⁾と前置きして、ヴィクセルの文章を引用している (筆者も孫引きの感否めないが引用する)。そのヴィクセルは次のように述べている。

「メンガーの名声はこの著作 (『原理』) によるものであり、それによって彼の名は後生に語り継がれるだろう。というのは、リカードの『原理』 (『経済学および課税の原理』1817年) 以来、ジェボンズの聡明で警句的な仕事や、ワルラスの不幸なまでに難しい著作を除外しない場合でも、メンガーの『原理』ほどに経済学の発展に大きな影響力をもった書物はないと断言できるからである。」(かっこ内筆者)³⁹⁾

経済学の発展に大きな影響力をもったと言わしめる理由は何だろうか。それは限界分析もさることながら、自然利子率と貨幣利子率の乖離現象に着目したことである。これを言明するとき自然利子率という概念はメンガーからの影響が強く反映されていると理解できる。もとより、この二つの関係からケインズも又多大な影響を受けたことは周知の事実である。彼の『貨幣論』のみならず『一般理論』はこの自然利子率が含意されたものであることは周知

の通りである。ハイエクがヴィクセルへの絶賛、そしてヴィクセルがメンガーへの絶賛はどのようなところにあるのであろうか。立ち入ってみよう。

その自然利子率とは主観が構成するものである。対極にある貨幣利子率は金融市場で発生する経験的経済現象である。しかし、自然利子率は資本という実物が為し得る生産力であり、先取りとしての概念であり、抽象的なかつ非現実的な概念である。しかしながら、経済学はそれを課題にせねばならない。それに気づいたことはヴィクセルの功績である。そして自然利子率と貨幣利子率との乖離が経済を混乱に陥れることに気づいたのである。この言説は経済学の問題だけではなく哲学的にも意義のあることである。そしてその視点こそメンガーに遡れるし、換言すればメンガーの根本思想からのものであることが理解できる。

ヴィクセルが提示した自然利子率とは、把握することができないが誰もが必要とする概念である。それは人間が実物世界で描いてきた資本の概念である。カントが判断力批判で投げかけたアンチノミー、つまり趣味判断は「一定の概念」に基づかないが「不定の概念」に基づくとしたことに通じる⁴⁰⁾。この趣味判断は経済の世界である。つまり自然利子率は資本の根源的な、換言すれば思惟の地平に置かれる概念である。その自然な（自然がもたらす）そして根源的な概念は経験することはできないが、考えることはできる、否考えねばならない概念で確実に存在する。哲学的に言えば、自然利子率は地平であるが故に主観が構成するものであり、それに対して貨幣利子率はどこまでも経験的で現にある利子率である。ヴィクセルはこの自然利子率を貨幣利子率の対極におき、それらの乖離現象から経済の変動理由を解き明かした。その実物の経済的現象はバーム・バヴェルクの資本と資本利子の概念を經由して気づいたものであるが、メンガーが捉えた経済がなくては出てこない概念であろう。メンガーは経済にはそのような自然な、根源的なシステムが存在する、それを発見し構築しようとしたのである。

対極にある貨幣利子率は貨幣経済が進展するに従い、具体化を伴われわれに身近に存在することになる。しかし、それは同時に資本という実物がな

し得る生産力という能力とはかけ離れたものである。ミーゼス、ハイエクそしてケインズが捉えた警句に似た理論は、貨幣利子率という安直な指標に囚われる人間であった。貨幣利子率が具体化すればするほど自然利子率は忘却の彼方に追いやられる姿である。われわれ人間は実に弱い。基本的に利潤を求めて貨幣額で覆われる現象である。ケインズは『一般理論』を上梓するに至って、その根本を忘れてしまったとハイエクは嘆いている⁴¹⁾。再度その名目の姿を厳しく戒めたのはミルトン・フリードマン (Freedman, M.) でもあった。それが貨幣利子率に振り回されるからである。その対局に自然利子率を置きわれわれを戒めたのである。経済はこの本質現象を忘却する傾向を常に持っている。

メンガーはそれに気づいたのである。メンガーが捉えた経済は先慮 (Vorsorge) という意思である。その先慮は構築のための気構えである。したがって、先取りということは当為として、もしくは演繹論でもしくは全体論で獲得されねばならない概念である。その演繹や全体に臨むためにメンガーは多くの対なる二つを提示して経済学に向かったのである。たとえば、真実財 (wahre Güter) に対して擬制財 (eingebildete Güter)⁴²⁾ である。そしてこの擬制財について、メンガーは「実際にはではなく人間の思念の中でのみ財としての性質を基礎づける関係にたつ物をば、われわれの判断の対象としているのである。」⁴³⁾ と述べている。この言説のなかで生じたのが自然利子率である、と言って過言ではない。いわば、自然利子率は演繹や全体論にあって初めて考えられる指標なのである。こうして自然利子率は思念の中から生まれたものである。換言すれば、現象に「定型的関係」つまり「一般的認識と一般的関連」を新たに見出したことになる⁴⁴⁾。これは既述のように、主観がどのようにして客観に昇華されるか、主観が科学性に向けどのように修正されるかの理論を生み出したことになる。

こうして見れば、自然利子率の概念をヴィクセルに与えたのはメンガーである。メンガーが巻頭に述べているように「理論的国民経済学は経済的行為にたいする実際的提案を取り扱うのではなく、人間が欲望満足に向けて先

慮的行為を展開するにあたってその基礎となる諸条件を取り扱うものである。⁴⁵⁾つまり、自然利子率は「先慮的行為」にとってまさにこの諸条件の一つと言えるであろう。

メンガーにとって、経済行為は先取りの指標がなければ進まない。もとより、それが正しいかどうかは後に分かることである。しかしそれと現実との比較検討によって欲望は実現か、非実現か、進められる。メンガーが消費者の需要を需要とは言わず需求 (Bedarf)⁴⁶⁾ と言ったのは、消費は先慮的行為を通して初めて実践できるのである。単に需要と言ってしまっただけでは演繹や全体論の前提が抹消されて経済という事実がリアリズムに語られていないのである。もし事前的かつ主観的内容を含意したところから出発しなければ経済学の科学性は失われる。そもそも経済とは過去よりも近未来に向けた意思を常に伴うものである。メンガーはそこに経済的な人間現象をおいてきたと言えよう。こうして、ヴィクセルそしてハイエクがメンガーを高く評価する理由が分かる、そしてその理由も明らかである。つづめて言えば、メンガー経済学の核心はこの先慮的行為の条件を整えることにあった。

ハイエクは述べている。「彼 (メンガー) にとって経済活動は本質的に将来に関する計画であり、時間区分の議論、人間が異なる欲望にかんして行う事前の考慮のための時間区分は、明らかに現代的な基調を帯びている。」(かっこ内筆者)⁴⁷⁾これが「メンガーの手にかかると、伝統的なドイツ流の教科書における古めかしい『根本的概念』に新しい生命が吹き込まれる。無味乾燥な羅列や定義に代わって、あらゆる一歩が先立つ一歩から必然的にしなう結果と見えるような分析の有力な手段となる。メンガーの説明はバーム＝バヴェルクやウィーザーの著作のような印象的な表現や巧みな定式化を欠いているが、実質的にはかれらの著作に決して劣らず、むしろ多く点で明らかに優れている。」(ルビは筆者)⁴⁸⁾メンガーの目指した経済学は将来に向けた、それには構築の哲学を含意した経済学であったと言えよう。将来に向けることは主観が取りなす構築の哲学を要請する。もとより経験が軽んじられているわけではない。主観の構築はことごとく経験から出発している。メンガー

経済学の核心はその構築の世界である。

いわば、あるがままの経験に真理があるわけではない。真理は経験に隠れている、それを発見しなければならないものであるが故に構築もしなければならぬ。経済学の科学性はそこに置かれている。それは構築されるものであるが故に地平に置かれるものである。地平は絶対性を希求する手立てである。地平は人間主観が要請した場である。経済学的に言えば、自然利子率も人間主観が発見した経済事象であるが、真理を求めるための条件でしかない。このような見地に立つことのできた経済学者はただ一人メンガーである。

7 メンガーが描く価値そして財の世界

前節で述べたように、メンガーは財についても「実際にはなく人間の思念の中でのみ財としての性質を基礎づける関係にたつ物をば、われわれの判断の対象としているのである。」と述べて、経済を思惟の世界で包んで見せた。それだけにその経済の世界に絶対性はあり得ないことは当然であった。メンガーの古典派経済学批判の一つはその価値の絶対性に対する批判であった。これはイギリス古典派、それを徹底させたマルクスの労働価値説の対極にある。メンガーの文章の中から拾ってみる。

「価格、いいかえれば交換において現れる財の数量は、たとえそれがわれわれの感覚に鮮明に訴えるために科学的観察のもっとも慣行的にとりあげられる対象をなしているにせよ、決して交換という経済現象にとって本質的なものではない。本質的なものはむしろ両交換者の欲望満足のための交換によってより良好な先慮がもたらされるということのうちに横たわっているのである。」⁴⁹⁾

「研究者は価格現象の領域において2つの財数量間の見せかけの相等性 (angebliche Gleichheit) をその原因にまで還元するという問題の解決に没頭し、ある者はこの原因をこれらの財の上に投下された労働量の等しさに、他の者はこれを生産費の等しさに求め、さらに、諸財はそれ

が等価物であるために相互に手わたされるのか、それとも交換において相互に手わたされるために等価物になるのかをめぐって論争がおこったのである。だが、2つの財数量の価値はこのような相等性（客観的意味における相等性）は実際はどこにも存在しないのである。」⁵⁰⁾

価格（価値）は交換経済の本質的なものではない。加えて、メンガーは後半の文章に注をつけ、相等性を掲げるアリストテレスからアダム・スミスの古典派経済学の研究者群までおしなべて批判は及んでいる。さらにメンガーは続ける。

「ある物が人間の欲望の満足に役立つという適正 *Tauglichkeit* を示すことができるのは、もっぱら、その物の性質によってだけである。けれども効用性 *Nützlichkeit* というのは、何ら物の客観的な性質ではなくて、（個体的もしくは種属的に）規定された事物の人間に対する関係すぎない。」⁵¹⁾

「価値は財に付着したもの、その属性ではなくて、むしろわれわれがまず自分の欲望の満足に、または自分の生命と福祉とに帰し、次にその排他的原因である経済財の上に移転した意義にすぎない。」⁵²⁾

価値は効用が生み出すものであるが、それは絶対性として捉えることはできない。そしてその価値は演繹、全体論の中で包括的に議論されることが述べられている。

価値とはその財を構成する質、具体的商品の質とは切り離されねばならない。確かにリングを買ったときそのリングの味（効用）を私たちは期待する。しかしその味が価値を構成するというのではなく、広くかつ根源的にリングが私たちに与える財としての全体性のなかで財なのである。したがって、その財が捉えられたときその価値も捉えられる。リングの価値はまさに他財との共同存在として、環境に照らして主観が捉える相対性の海原の中にある。したがって、その時点でのその場所でのリングの価値であり一期一会の価値である。

したがって、財は競争にして、福祉にして制約の中に置かれているから排

他の原因を含意したものである。これを哲学的に言うならば、現象学的である。存在は共同存在で有り、互いに存在し合うが故に存在し、同時に制約の中に置かれているのが存在である。

経済のシステムはまさにそのような現象学的世界を顕現しているのである。メンガーが捉えた経済はそのような世界で有り、先慮的行為のなかで捉えられるものである。財やその価値を問題にすると必ず福祉や調和を究極に置かれる。これは経験だけでは絶対に捉えることはできない世界である。筆者は一時期ハイエクの自生的秩序が行き着く場所を求めて渉猟したが、それは徒労に終わった。しかしその渉猟は無駄ではなかった。福祉や調和そして秩序は捉えることはできないが、しかしなくてはならない目的の世界で有り、超越論的な世界である。財はどのような一財であってもその世界との関わりで価値が生じている。そのような財の世界をメンガーは描き通したのである。それはまたヒュームが捉えた社会、カントが辿った判断力の世界とも軌を一にする。

したがって、演繹論、全体論は不可欠となる。経済は財や市場、個人や企業、財や貨幣を議論しなければならないが、主観であると同時に客観としての意義を持ちうるものである。誤解を恐れず述べるなら、形而上学の世界が目の前にあるのである。マルクスが唯物論として経済学を捉えたが、思惟の対象である限りやはり形而上学的に捉えねばならないところに帰着する。

労働価値説の矛盾を見よう。マルクスは価値は労働である、と定義する。そして労働は時間で計る。しかしながら、難問が待ち構えていた。それは労働の質である。単純労働と複雑(精密)労働である。例えば、穴を掘るような誰でもできる労働と時計の歯車の製作という熟練労働はどのような比率になるのであろうか。貨幣が交換を媒介するが、一日穴を掘った労働と歯車の製作の労働には同じ一時間でも、穴を掘る労働にX倍掛けた労働が等しくなるに違いない。マルクスは難問Xはどのようにして見いだすかと行き詰まった瞬間、Xは市場が決めるとする。価値を測定するのは労働だと言いながら、そして時間だと言いながら肝心の価値の質を決めるXは経験(市場)

が示すところであると言う。マルクスは自らの労働価値論を放棄して市場に委ねると言う循環論に陥っている⁵³⁾。ならば、最初から価値は市場(目的や条件)が決めると言えばよいのではないか。市場とはハイエクがいみじくも述べてきたように、捉えることはできない自生的秩序の一つである。価値はカントが説いた「目的無き合目的性」の自生的秩序で成立している。ミクロの価値はマクロの自生的秩序のなかで生起している。価値はミクロから決まるのではなく、マクロで決められる。経済はこの逆対応の世界である。

メンガーは財を低次財と高次財とに分けた。そしてあくまでも高次財の価格は低次財の価格で決まるとした。ウィーザーはこれを帰属の理論としてあらためて述べることにした。このウィーザーの説明は間違っていないが、誤解を生む。それはいかにも第一次財に確固たる目的が存在し、その目的に高次財が惹きつけられているかのように理解される。消費者の消費目的が即経済全体の目的かといえばそうではない。問題は経済という全体像の目的はカントのアンチノミー(「一定の概念」に基づかないが「不定の概念」に基づく)を含む「目的無き合目的性」にある。メンガーは財において低次財と高次財との関係だけではなく、補完財を含む全体を議論している⁵⁴⁾。多くの経済学者はメンガーの帰属の理論を象徴的に語るがこの本質的議論が欠けている。メンガーは述べている。

「ある高次財の補完財という場合には、問題となる財を一次低い財に変形するために必要な同時の財だけを考えるべきではなく、他に、問題の高次財を人間の欲望満足に用いるためにその高次財以外に必要な生産要因の全体を考えるのでなければならない。個々の生産要因が財としての性質をもつかどうかは、われわれがそれらの補完財を支配しているかどうかによって左右されるという法則は、このようなより包括的な意味において理解されなければならない。」⁵⁵⁾

メンガーは価値の絶対性など最初から放棄している。価値は唯名論と言えなくもない。なぜなら、価値は存在するが定まらないからである。しかしメンガーに言わせれば条件と目的を設定するならば確固たる価値が見えてく

る。もとより、その条件と目的が変わればまた価値は変化を余儀なくされる。価値は先験的に存在するのではなく、あくまでも後天的属性である。それに対して、マルクスは労働ありき、そして価値ありきの世界から出発する。それだけに具体的財や市場に提示されるや否や価値は崩れてしまう。それはあり得ない確固たる価値から出発しているからである。もちろん古典派経済学もその中に入っていた。

8 経済学におけるミクロとマクロ

これまで述べてきたことから分かるように、ミクロとマクロにも直接的に越えがたい壁がある。メンガーもハイエクも述べていたように、個人と経済全体との間には越えがたい壁が存在する。しかし経済をつくり出しているのは個人消費者である。この点においてはっきりした絆(靱帯)を見いだしておかねばならない。

塘茂樹はメンガーの『原理』が二つに分断されていて、全体が8章からなる『原理』は前の部分が5章で一区切り、後の部分6章から8章まで一纏めとされて経済学では無視された。つまり、前の第1章から第5章までは経済学で扱える、後半部分はハイエクの自生的秩序の部分と理解されて『原理』を一貫した取り扱いとしてこなかった、と嘆いていた⁵⁶⁾。これはまことに遺憾なことで、塘に同意する。筆者にしてみれば、まさにあり得ないことが起きていたのである。メンガーが生きていたらさぞ嘆いたことであろう。しかし既述のように、メンガーの間近にいたウィーザーでさえメンガー経済学の真意を理解できなかったとすると、当然のことかもしれない。ここでメンガーの真意を把握すべく務めてきた筆者はこのミクロの部分とマクロの部分の統合をメンガーの真意に基づいて述べてみよう。

もとより、メンガー経済学を述べるにあたり、このミクロとマクロという現代経済学で市民権を得ているタームに違和感を覚える。というのは、マクロ経済学を打ち立てたのはケインズである。しかしハイエクに言わせればマ

クロ経済学は現に存在するが、それに対照させるミクロ経済があるかと言え
ばないのであると⁵⁷⁾。ケインズが輝いて光るのは所得変動を通して経済の
攪乱現象を止めることが可能だと説いたことである。ケインズはミクロ経済
学については何も言っていないことに等しい。したがって、ここではこのミ
クロとマクロの議論とは別に、単にミクロを微視的視点とマクロを巨視的視
点と理解して進める。

塘は『原理』を一貫した思想の下で考えていかねばならないとしているこ
とに同意する。しかしその根本の思想が塘には欠けている。既述のように、
メンガーは演繹論、全体論を『原理』にも『経済学の方法』にも貫いている。
つまり、メンガーが経済（もしくは経済学）で究極目的とするところは福祉
であり、調和（秩序）なのである。この演繹論や全体論では、個人の需要と
いうミクロ段階の意思は直接福祉や調和（秩序）という全体に直接結びつか
ないことはこれまでの叙述で明らかになったと思う。そうであるが故に、ミ
クロ段階の消費を需要と言わず需求や支配そして先慮というような事前準備
ともとれるようなタームで対応したのである。要は、マクロ段階の福祉や調
和を実現せんがためにより弾力的なミクロ段階の需要のために需求そして支
配、先慮の含みの中に入れたのである。これはあくまでも経済が演繹（全体）
論で議論されねばならないことを意味している。

既述のように、ヴィクセルこそ近代経済学を打ち立てた一人であり、その
基盤にメンガーが存在する、とハイエクは見た。「経済学の発展に大きな影
響力」の意味である。確かに限界理論が近代経済学に貢献したことは経済
学者誰もが認めることである。それは限界理論が価格や交換に確固たる理
論の裏付けを与えることとなったからである。これこそリアリズムである。
その確固たる限界理論であるが、しかしメンガーはそれ自体を重要視した訳
ではない。なぜなら、そのミクロ的限界効用が即マクロ的福祉や秩序に直結
しないからである。だからこそ、メンガーは需要ではなく需求や支配という
弾力的タームをもって、マクロ的福祉や調和を構成に対応しようとしたので
ある。換言すれば、需求や支配はマクロ的福祉や調和の全体構造に対して弾

力性を含意し、演繹的に組み込まれるミクロ的視点と言えよう。メンガーの『原理』はその演繹的構造で貫かれている。ウィーザーやバームはこの視点が欠けていた。これをしっかり受け継いだのがミーゼスやハイエクであった。言えることは、この演繹的構造が『原理』であるよりはその第2版である『理論』の方に明確に打ち出されていることである。

この演繹の下地は財にも及んでいる。財の価値が財の属性によらないのみならず、予め備えられているものではないことを意味している。価値は交換に及んで具体化されるものである。最終一単位の効用も交換の機会に接して自覚されるというものである。したがって、その最終単位を自覚するもの、そもそもその財の支配無くしてはあり得ない。価値はまさに現象学的な多くの条件や事象を視野に入れねば議論できないのである。

換言すれば、価値が実現する事象が述べられたのである。古典派が解けなかった価値が交換という社会的事象によって、後戻りせず（財の属性によらず）説き明かされた⁵⁸⁾。限界効用は消費者という主観の構成が交換という客観の構成へ確固たるものであるが、弾力性をもって途が開かれたと言えよう。こうしたときに主観から客観への途が開かれていることにも気づかされる。むしろ、メンガーは、価値は主観ではもたらされず、客観で実現されるものであることを印象づけてきた。確かに、メンガーは決して市場を述べることはしなかった。その意味でワルラスに引けを取るであろう。しかし価値を具現化するプロセスの論理は高く評価されよう。それはリアリズムの論理である。これはワルラスに欠けているところである。

もとより、メンガーは現代でいうところの、ミクロ経済学だけではなく、マクロ経済学への途を開いたと言えよう⁵⁹⁾。もちろん、そのマクロ的機構は演繹論、全体論に照らして構成されることは言うまでもない。これはこれまでの経済学にはなかったことである。

周知のように、ケインズは古典派も新古典派も一つにして批判の対象としたが、限界理論に視点をおくならばケインズが構築したマクロ経済学はその新古典派に依存していることは誰もが認めるであろう。恩師マーシャ

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

ルを批判したケインズではあるが、限界原理を認めなければ消費関数は夢物語となるであろう。ことほどまでに、ケインズもまた現実を直視して経済学を打ち立ててきた。もとより、ケインズ理論(『一般理論』)とメンガーとを直結することはとうていできない。しかし、ケインズが自らの理論に施した前提や条件には多くの主観に囲まれたものであることは既に述べてきたところである⁶⁰⁾。これはミクロ的主観からマクロ的客観を構成することの確認とも受け取れる。またメンガーが堅持していた全体論はケインズの『確率論』に表れているところである。それはまた経済学を数学から遠ざける理論はシェボンズやワルラスとは異なる立場であったことは明らかである。メンガーに近い思考をケインズがもっていたことは間違いのないであろう⁶¹⁾。

9 経済学における科学性とは

既述のように、メンガーは「理論的国民経済学は経済的行為にたいする実際の提案を取り扱うものではなく、人間が欲望満足に向けて先慮的行為を展開するにあたってその基礎となる諸条件を取り扱うものである。」「したがって理論的国民経済学と経済人の実際の行動との関係は、いわば化学と実験化学者の行動との関係と少しも変わらない。」と述べている。このような説明表現は『経済学の方法』でもなされているところである⁶²⁾。

これは誤解をも生む箇所でもある。社会科学が自然科学と同様だと理解されかねないところである。しかし、よくよく考えれば社会科学と自然科学とは基本的に異なる。これは『経済学の方法』の一節からも明らかである。ではどのような意味で社会科学の科学性が主張されているのであろうか。

これまで述べてきたことから明らかなように、メンガー経済学は演繹論、全体論そして構築の哲学で支えられている。それは「その基礎となる諸条件を取り扱うものである」という叙述に現れている。メンガーは『経済学の方法』で述べている。

「国民経済の現実の現象は、実際、定型と定型的関係、すなわち、一

定の現象形態のくり返しのなかでの現実的な規則性、共存と継起のなかでの現実的な規則性をわれわれに提供している。これらはけっして例外のない厳密さをもつものではないが、それを確立することはなんとしてみても理論経済学、とくにその現実主義的方針の課題である。」⁶³⁾

これを見ると、社会科学も自然科学も同様だと理解しかねない。しかしよく読めば分かるように「確立することは…」で述べているように、構築の哲学が含意されている。つまり「価格形成は…化学の法則が実験化学者の意思から独立しているように、私の意思から独立している。」⁶⁴⁾ 自然科学も社会科学もこればかりは同じこと、同じ条件や環境が備えられれば同様の事象が実現可能である。その意味で自然科学も社会科学も同様である。しかしながら、社会科学、当面しているわれわれの経済学においてその同じ条件を整えられるだろうか、そしてその条件とはどのような条件であろうか。その疑問に対して、条件とは既述のように、福祉そして調和（秩序）なのである。メンガーはそれらに向けて精密的方针と現実主義的方针をもって進めようとする。

精密的方针と現実主義的方针について具体例を出して述べてみよう。既述のように、擬制財について、メンガーが「実際にではなく人間の思念の中でのみ財としての性質を基礎づける関係にたつ物をば、われわれの判断の対象としているのである。」と言っていたように、真実財に対して擬制財、貨幣利子率に対して（ヴィクセルが編み出した）自然利子率、これらの擬制財、自然利子率は条件である。そして「人間の思念の中で」編み出されている。これらは精密であり、なおかつ現実的である。

ここに自然科学と社会科学の決定的な相違も明らかになる。自然科学は対象化してそこから法則を見いだそうとしている。しかし社会科学の事象は人間がつくり出している。もとより、それはあるがままの事象ではない。たとえ、不適切な価格、不適切な所得であっても構築の賜である。したがって、その善し悪しは社会的にかつ長期的に、福祉や調和（秩序）という包括的な括りで昇華されねばならない。それには必ず条件が置かれねばならない。その条件は精密に人間行為を分析せねばならず、同時にそれは現実を見つめなけれ

ばならないことを意味している。社会科学はこれら精密の方針と現実主義的方針の賜である。メンガーはスミスを高く評価するが、スミス等イギリス経験主義が築いてきた経済学に批判を送ることを忘れはしなかった。メンガーは述べている。

「アダム・スミスに、また、その弟子たちのなかで政治経済学の発展に最も大きな成果を挙げた人々でさえ、実際に非難できるのは、…無反省的なやり方で成立した社会制度とこの制度の国民経済にとっての意義とについて、かれの理解が不足していたということであり、…国民経済の諸制度はまったく社会自体の共同意志の意図された所産、社会成員の明らかな合意または実定的立法の結果であるという見解である。…アダム・スミスおよび彼らの学派もまた、…主として国民経済の実用主義的な理解に努力しているのであって、無反省的な仕方で行った社会形象の広い領域はかれらにはまったく理解されていない。」(一部修正訳、筆者)⁶⁵⁾

スミスがかかげた経済学は調和や秩序が人々によって自然(「見えざる手」)につくられている、という見解には同意する。しかしその隠れた「見えざる手」に十分なメスが入れられず「共同意志」「合意または実定法の結果」であると結論づけたところに誤りがあると言う。社会や経済の事象はそうではなく、「無反省的な仕方」で成立したものがある、つまり法(実定法)に規制されることなく、自らが条件を見出しているではないか。それをスミスは見落としている、と言うのである。それはかくれたところにある条件である。

その「見えざる手」を見えるようにしたのがメンガーである。擬制財にしろ、自然利子率はその「見えざる手」の一つと言えよう。それは全体論そして演繹論を不可欠として編み出したものである。と言えよう。もとより、経済はいやが上にも見えない対象を取って取り込んでいる。だが、その見えない対象は自然科学の対象と何ら変わらない。なぜなら、自然科学が発見の科学であると同時に社会科学も擬制財や自然利子率を発見しなければならなかったからである。ハイエクは新たな発見を市場に求めた⁶⁶⁾。市場は発見する場

なのである。その意味で経済学は構築の科学として出発しなければならないのである。この視点はスミスにも持ち合わせがなかった。経験からくる慣行に法則性を見出そうとしていたからである。メンガーはこれをもって実用主義と批判した。

換言すれば、メンガーは科学性として迷いのあった古典派経済学から経済学を救ったとも言えよう⁶⁷⁾。もとより、限界効用が心理学に置き換えられて科学性を発揮したのでもない。さらに数学を駆使するような科学性でもない。オーストリア学派経済学の科学性は人々をあらわにして、その人々の全体論で始めて可能になる。擬制財も自然利子率も人々が全体論として編み出したものである。それは経済現象を精密に現実を観察することから始まる。その意味で自然科学と異なるところはない。

このような全体論そして哲学的な背景をおかざるを得ない経済学には視野の広さが要請される。それに応えるべく、メンガーの読書力は人知を超えたものであった。ハイエクは述べている。「メンガーは文献に関する知識の広さにおいて他の限界効用の創始者たちをおそらく凌いでいる。」⁶⁸⁾しかしながら、同じ限界効用の創始者のジェボンズやワルラスがクルノー (A.A. Cournot) の著作に負っているのに対して、メンガーはクルノーの著作を参照しなかったし、チューネン (J.H. Thunen) の著作を知らなかったという⁶⁹⁾。つまり、メンガーは哲学的な広さを必要としていたのである。それだけに、当時の経済学者が要請していた数学はむしろ退けるという特色を持たざるを得なかった。限界効用というすこぶる数学的な視点を持ちながら、メンガーは経済学に数学を用いることに厳しい吟味がなされた。同じ限界効用をもって体系的に経済学を展開した三人でありながら、メンガーは数学を用いることなく科学性を追求した。その意味で経済学が科学ならメンガーにおいて科学的な経済学は他にはないであろう。

こうしてリアリズムに徹した経済学の科学性は確保されたのである。もとより同時に全体論はいやが上にも哲学を要請する。いわばオーストリア学派経済学は確固たる科学性を維持しようと努め、その維持のために全体論を要

請せざるを得なかった。したがって、メンガーの経済学には哲学が伴走することとなる。しかしながら、メンガーは具体的に哲学の要請を述べることはなかった。この全体論そして哲学の要請はミーゼスやハイエクに確かな形で継承された。

注

- 1) F.A. Hayek, Chap.2, *Carl Menger (1840-1921)*, (*The Collected Working of F.A.Hayek Vol. IV, The Fortunes of Liberalism:Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom*,) Routledge 1992, pp. 67-69. (『カール・メンガー』, 八木紀一郎監訳『ハイエク全集Ⅱ▶7』春秋社, 2009年に所収, 165-166頁)
- 2) W.M. Johnston, *The Austrian Mind An Intellectual and Social History 1848-1918*, The Regents of the University of California University of California Press, 1972. pp. 92-93. (井上修一・岩切正介・林部圭一訳『ウィーン精神Ⅰ』, みすず書房, 1986年, 140頁)
- 3) W.M. Johnston, *Ibid*, p. 101. (同書, 154頁)
- 4) *USM*, S.43. ((福田孝治／吉田昇三訳『経済学の方法』51頁)日本評論社, メンガーは『経済学の方法』において社会科学の一般法則に倫理的世界を組み入れていた。
- 5) W.M. Johnston, *Ibid*, p. 92. (同書, 139頁)
- 6) Carl Menger, *UMS (Untersuchungen über Methode der Socialwissenschaften, und der politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig 1883) もとより, ドイツ歴史学派を一括りで述べることは危険を伴う。旧と新との分けて考えねばならない。しかし言えることは, メンガーとの方法論争だけではない, マックス・ウェーバーとの価値判断の論争を起こしたことは周知の事実である。要は, イギリス経済学そしてイギリス経済に対抗するという後進国ならではの意識と価値観が自らを偏狭に追いやったことは間違いないであろう。
- 7) *UMS*, S.XX II. (『経済学の方法』15頁)
- 8) Menger, C., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Mit einem Geleitwort von Richard Schuller Aus dem Nachlass Herausgegeben von Karl Menger, Neudruck der 2. Auflage Wien 1923, Scientia Verlage Aalen. (八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学』, みすず書房) 周知のように, この第2版の日本語訳は『国民経済学原理』と訳さず『一般理論経済学』と訳している。その理由と経緯を玉野井は一橋大学にあるメンガー文庫の中のメモ書きから発見している。『一般理論経済学』「メンガー遺著の初訳本刊行にあたって」のvi頁を見よ。

筆者も第1版を『原理』とし第2版を『理論』とする。

- 9) Menger, C., *GV2*, S.57f. (『理論』101-102頁) メンガーは注で述べている。「次のような欲望の満足だけが、調和的と名づけられる。つまり、ある人格の欲望すべてが例外なく完全に満たされる場合—しかしこんな場合は実際上ほとんど問題にならないので—あるいは、より重要な欲望を先に満足させ、重要度の劣るものを後にすることによって、全体の目的(われわれの生命と福祉の維持)を完全とはいえないにせよ可能なかぎり完全に達成する場合である。人間の正しい生命哲学は、真の欲望と想像上の欲望との境界を正しく知ることで尽くせるものではない。それらの欲望のヒエラルヒーを知ること、またその欲望と、自分の個性と自分のおかれている環境とに適した欲望満足との調和を知ること、またその本質的な部分をなしているのである。」
- 10) *UMS*, S.240. (『経済学の方法』221頁)
- 11) 金井良太『脳に刻まれたモラルの起源』岩波書店、2013年、4頁。もちろん金井はカント哲学の手法、演繹に気づいてはいない。換言すれば構築の哲学に気づいていない。これを成し遂げたのはハイエクである。
- 12) もとより、ウィーンはその袋小路を打開する下地を持っていたと見ることもできる。マッハの哲学は形而上学と自然科学を結ぶものであった。しかしながら、簡単ではない。実証性は無限の実証性を呼び起こす。
- 13) 『経済学説全集 第9巻 近代経済学の生成』に所収、山田雄三『第3章 カール・メンガー』、河出書房、昭和30年、94頁。
- 14) Wieser, F.F. *Der Natuerliche Wert*, S.7.
- 15) Hutchison, T.W. *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Oxford, 1953, p. 166.
- 16) *HH*, p. 57. (島津 格訳『ハイエク、ハイエクを語る』名古屋大学出版会、35-36頁) ハイエクは続ける。「決定的な影響は、メンガーの『経済学原理』を読んだことだ、…あるいは『経済学原理』だけでなく『方法論集』から、より多くを引き出したかもしれません。それはその本が、方法論に関して述べているからというより、一般的社会学について述べていることからですが、様々な制度の自生的生成という考え方を、この本ほど見事に論じている本を、他には知りません。」
- 17) *UMS*, S.36f. (『経済学の方法』46頁)
- 18) 塘 茂樹『メンガー『国民経済学』の統一的解釈について』、『京都産業大学論集』(社会科学系列、第23号、2006年3月)所収、74頁を見よ。塘は言う。「メンガーの『原理』は、近代経済学史上、マイクロ経済学成立の皮切りとなったいわゆる限界革命の担い手である三著作の一つとして言及される。しかし、その場合、著作全体ではなく、最初の5章だけが言及の対象となるにすぎない。残りの3章は、マイクロ経済学の基礎付けという観点からはまったく無視されてきたので

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

ある。」つまり、『原理』は次の8章より成り立っている。第1章 財の一般理論、第2章 経済と経済財、第3章 価値の理論、第4章 交換の理論、第5章 価格の理論、第6章 使用価値と交換価値、第7章 商品の理論、第8章 貨幣の理論。5章までと6章以下が切り離されてきたというのである。そしてこの切り離しの議論は正しくなく、統一して議論されるべきだというのである。筆者も同感である。ただ筆者はその統一の手立てにおいて塘には賛成できない。メンガーの経済学を支える核はあくまでも演繹的方法である。

- 19) Menger, C., *GV2*, S.IX. (『一般理論経済学』8頁)
- 20) *UMS*, S.44. (『経済学の方法』52頁)
- 21) 商品の交換価値を決める分解部分(賃金、利潤、地代)である労働、支配労働とその商品が支配する労働、支配労働はどのような一致を見ることができるのであろうか。いわば、労働価値説は価値の実体に労働を置いたこと、そして等価交換をおいたために、量の比較で確かな理論を見ることができなかつたと言えよう。
- 22) メンガーは1871年に『原理』、ジェヴォンズは同年に『経済学の理論』、ワルラスは1874年～1876年にかけて『純粹経済学要論』を発表した。
- 23) 限界効用という言葉について述べておかねばならない。マーシャル(A. Marshall)は『経済学原理』の中で述べている。「限界効用(Grenz-nutz)という用語を…最初に使ったのはオーストリアのウィーザーである。…これはジェボンズの最終効用(Final)という用語に対応するものである。ウィーザーはジェボンズを先行者としてその序文で認知している(『自然的価値』《Der natueliche Wert, 1889》英語版、序文23ページ)。ウィーザーがあげたこの学説の先行者の表は1854年のゴッセンにまでさかのぼっている。」A. Marshall, *Principles of Economics* (1890) ninth edition, by C.W. Guillebaud, 1949, p. 94. (馬場啓之介訳『経済学原理II』東洋経済新報社、昭和41年、18頁注の(2))
- 24) 『経済学大辞典III』(東洋経済新報社、昭和55年、420頁、竹内靖雄)
- 25) C. Foehl, *Geldschaepfung und Wirtschaftskreislauf*, Duncker & Humblot 1937. (日下藤吾訳『経済循環の貨幣的構造』大鵬社、1942年)
- 26) M. Kalecki, *An Essay on the Theory of the Business Cycle*, 1933.
- 27) 馬渡尚憲『経済学の方法』、日本評論社、1990年、122頁
- 28) W.M. Johnston, *Ibid.*, pp. 80-81. (『ウィーン精神』123頁)
- 29) もとより、この議論はハイエクが『隷従へ道』で述べたように、マルキシズムは国家社会主義の道を歩むことが必然となり、全体主義と同じ仲間であり自由主義と民主主義の対極におかれたことは周知の通りである。
- 30) W.M. Johnston, *Ibid.*, p. 86. (『ウィーン精神』131頁)
- 31) W.M. Johnston, *Ibid.*, p. 184. (『ウィーン精神』282頁)

- 32) これについて一つの例を挙げることができよう。ハイエクは自戒論調で示している。ハイエクもベームに従って彼の資本の理論に「平均生産期間」を援用したからである。ハイエクは言う。「ベーム・バヴェルクは基本的に正しかったのですが、平均生産期間を使った説明は、あまりにも単純化し過ぎて、適用を誤らせるものでした。」そのためにハイエクは『資本の純粹理論』を上梓したのだが、大変難解なものになってしまったと。ハイエクは続ける。「様々な投資期間の広がり代わりに単純な平均生産期間を代置する、という簡単な形式をとれないとすると、全体の様相が変わってしまうのだ、ということが非常にゆっくりとわかってきたのです。平均生産期間は、原理を示す第一モデルですが、ほとんど現実には適用できません。当然のことですが、現にある資本は、一貫して所与の期間のセットを基礎にして形成されたのではなく、予想されていなかった新たな諸目的に対して蓄積された実物資本財を不断に再使用し続けることで形成されたのです。だから、動的な過程は、〔元のモデルとは〕非常に異なったものになるのです。』*HH*, p. 90., pp. 141-142. (嶋津 格訳『ハイエク、ハイエクを語る』91-92頁, 181-182頁)
- 33) メンガーは限界効用を次のように述べている。「具体的な各場合において、1人の経済人の支配可能な財数量の一定部分量の支配には、全数量によって確保されてきた欲望満足のうちこの人にとって最小の意義しかもたない欲望満足がかかっている。したがって、支配可能な財数量の一部分量の価値は、この人にとっては、全数量によって確保され、また同一部分量をもってもたらされうる複数の欲望満足のうちで、最も重要さの小さいものが彼に対してもつ意義に等しい。」*GV*, S.98f. (『原理』85-86頁) ハイエクはこの記述を「…限界効用という用語を用いず、価値を説明するときにはつねにいくらかきこちないが正確な言いまわし…」と言っている。Hayek, F.A. *Carl Menger*, (『カール・メンガー』168-169頁, 『ハイエク全集Ⅱ▶7』に所収)
- 34) 長 守善『ヴィーザー』(河出書房『経済学説全集9』昭和30年に所収), 195頁
- 35) Hayek, F.A., *Friedrich Freiherr von Wieser*, S.XI, (Wieser, F.F. *Gesammelte Abhandlungen, Mit einer Biographischen einleitung* Herausgegeben von F.A.v. Hayek, Verlag von J.C.B. Mohr <Paul Siebeck> Tuebingen 1929.)
- 36) W.M. Johnston, *Ibid.*, p. 82. (『ウィーン精神』124頁)
- 37) W.M. Johnston, *Ibid.*, p. 184. (『ウィーン精神』125頁)
- 38) *Carl Menger Gesammelte Werke Herausgegeben mit einer Einleitung und einem Schriftenverzeichnis* von F.A. Hayek Band, *Einleitung* von Hayek London, 1934 (S.VII ~ S.XXXVI) J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen (法政大学経済学協会, 経済学部研究室訳『カール・メンガー評伝』巖松堂書店, 昭和

- 10年、『経済志林』に所収、143頁), F.A. Hayek, *The Fortunes of Liberalism, Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom*, Edited by Peter G. Klein. The Collected Works of F.A. Hayek, Volume IV, 1992. p. 75. (『カール・メンガー』, 「ハイエク全集Ⅱ▶7」『経済思想史論集』に所収, 春秋社, 2009年, 171頁)
- 39) K. Wickcell, *Carl Menger*, 1921, p. 118.
- 40) これについては拙著『ハイエク・自生的秩序の研究—経済と哲学との接点—』のカントの第三批判の援用を見よ。280-327頁
- 41) *HH*, p. 90. (『ハイエク, ハイエクを語る』91頁)
- 42) Menger, C., *GV2*, S.16. (『理論』48頁) この擬制財についてメンガーは述べている。「1. 実際には存在しない人間的欲望が誤って前提される場合。…例えば実際にはまったく存在しない病気のための医薬品, 妖術や魔法を防ぐ手段…。2. 物には実際には属していない諸性質や諸作用が…誤って帰せられる場合。化粧品, 護身符…。3. 実際にはそうでない物が誤って支配可能であると考えられる場合。」そしてこの真実財と擬制財の区別を既にアリストテレスが提示していたと言う。
- 43) Menger, C., *GV2*, S.17. (『理論』48頁)
- 44) *UMS*, S.6. (『経済学の方法』21頁)
- 45) *GV*, S.IX. (『原理』vi頁)
- 46) 「欲望の満足にたいして前もって配慮する必要, すなわち将来の時期のために需求」*GV*, S.33. (『原理』日本経済評論社, 30頁)
- 47) Hayek, F.A. *Carl Menger*, p. 71. (『カール・メンガー』168頁, 『ハイエク全集Ⅱ▶7』に所収)
- 48) Hayek, F.A. *Carl Menger*, p. 70. (『カール・メンガー』167頁, 『ハイエク全集Ⅱ▶7』に所収)
- 49) *GV*, S.172. (『原理』149頁)
- 50) *GV*, S.173f. (『原理』150-151頁)
- 51) Menger, C., *GV2*, S.10. (『理論』39頁)
- 52) *GV*, S.81. (『原理』注, 70-71頁)
- 53) マルクス述べている。「より複雑な労働は, ただ, 単純な労働が数乗されたもの, またはむしろ数倍されたものとみなされるだけであり, したがって, より小さい量の複雑労働がより大きい量の単純労働に等しいということになる。このような換算が絶えず行われているということは, 経験の示すところである。」K. Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*, S.59. (大内兵衛・細川嘉六監訳『資本論』大月書店, 60頁) この経験とは市場を指すことは間違いない。
- 54) Menger, C., *GV2*, S.23f. (『理論』56-62頁)

- 55) Menger, C., *GV2*, S.24. (『理論』 58 頁)
- 56) 注の 18) に同じ。塘茂樹, 同書, 74-75 頁。塘は言う。「本稿はいうまでもなく、羅列説を採らない。むしろメンガーの『原理』は、ある一つ概念に基づいて、統一的かつ体系的に著述されており、…理論的分断などなかった…を主張することが本稿の目的である。その概念とは『支配』であった」と。しかし筆者にしてみればメンガー思想にはもっと深遠な哲学が沈潜していることを指摘したい。残念ながら、この報告では『経済学の方法』からの引用が皆無であることも指摘しなければならない。
- 57) Galbraith, J.K., *History of Economics The Past as the Present*, Penguin Books, 1989, p. 235. (鈴木哲太郎訳『経済学の歴史』, ダイアモンド社, 1988 年, 336 頁) ガルブレイスはハイエクの見解を受けて述べている。「いかにして完全雇用と物価安定とが達成されるかについての講義や議論は、マクロ経済学と称する経済学の特殊部門の中へ切り離されてしまうことになる。一部の学者はその専門を『マクロ』と呼ぶようになる。これはことのほか悪趣味な略語である。他方、ケインズによって荒らされずに残った分野はミクロ経済学と呼ばれるようになる。これは、同じくいやらしい専門的俗語で単に『ミクロ』と呼ばれる。」
- 58) *GV*, S.26f. (『原理』, 81 頁, 144-147 頁), *GV2*, S.120f, S.167-348. (『理論』 1 巻 181 頁, 2 巻 285-348 頁)
- 59) マクロ経済学の完成者はケインズである。そのマクロ経済学は労働市場における限界生産力、また国民所得、有効需要の実現に当たっては総需要関数や総供給関数が裏付けを担っているし、投資乗数を担うのは限界消費性向であることはいうまでもない。それはすべて限界原理に基づくものである。同時にケインズは所得変動を通してという、全体論を伴っている。この視点はメンガーに通じるものがある。
- 60) 拙著『ケインズ『一般理論』における主観主義(1)~(5)』, 昭和 61 年~昭和 63 年, 国士舘大学政経論叢に所収, 第 58, 61, 62, 64, 66 号
- 61) ケインズは『確率論』で述べている。「類比の方法と純粋帰納の方法とをいわずにせよ頼りにする推論を帰納的と呼ぶのは有益であろう。しかし、帰納的という用語を使うからといって、これらの方法が現象的な経験の対象や経験的な問題と時には呼ばれるものに必然的に限定されるということを示唆するつもりはない。すなわち、抽象的で形而上学的な研究にそれらを用いる可能性を最初から排除するつもりはないからである。帰納的という用語はこのように一般的な意味で用いられるけれども、純粋帰納という語句は帰納的推論のなかの事例の繰返しから生じる部分のために残しておくなければならない。」 *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. 8. (A Treatise on Probability 1921) pp. 242-243.* (佐藤隆三訳『ケインズ全集第 8 巻 確率論』)

メンガー経済学の世界 (2) (山崎)

東洋経済, 2010年, 253頁)

- 62) *UMS*, S.44. (『経済学の方法』52頁)
- 63) *UMS*, S.47. (『経済学の方法』54頁)
- 64) *UMS*, S.IX. (『経済学の方法』vi頁)
- 65) *UMS*, S.200. (『経済学の方法』183頁)
- 66) *LLL2*, pp. 121–122. (『法と立法と自由II』169–170頁)
- 67) もとより、新古典派経済学に確固たる定義があるわけではない。通常新古典派経済学と言えば限界理論（もしくはそれに基づく微視的価格分析）を取り入れたということで古典派経済学との区別がなされた。その新古典派経済学にミーゼスやハイエクを入れることはできるであろう。同時に、新古典派経済学の中の重鎮、マーシャルなどは異なってより科学性をもったところにミーゼスやハイエクが位置すると言えよう。カズナーは新古典派経済学とミーゼスとの相違点を次のように述べている。「20世紀の大部分の時代（とりわけミーゼスのアメリカ到着直後とそれ以降の数十年）の特徴である広範囲にわたる介入主義政策の理論的根拠を提供したのが正統学派（新古典派）経済学だったことに驚かされる。この明らかな矛盾は、新古典派経済学は現実を適切に説明していないことに起因する。事実、経済学者たちは、その現実妥当性に関して異を唱えた。…多くの経済学者が指摘するように、新古典派経済学の理論の世界とは違い、現実世界の競争は不完全で、…。実のところは、新古典派理論では説明できず、したがって、解決策も提示できない現実世界の問題に対処する政府介入の必要性を叫ぶようになった。つまり、政治哲学としての介入主義を受容することと、自由市場資本主義の欠点を論証するのに経済学者が『非現実的な』モデルを使うことは対応しているのだ。彼（ミーゼス）にとって、新古典派経済学の発展はまったく意味のないものだった。ミーゼスが自ら生きた時代の介入主義的な経済学に抵抗したのは、間違いなく、彼（ミーゼス）の経済学がオーストリア学派的な独自性をもっていたからだ。」(かっこ内筆者) I.M. Kirzner, *Ludwig von Mises: The Man and His Economics*, Wilmington, Delaware: ISI Books, 2001, p. 150. (尾近裕幸訳『ルードヴィヒ・フォン・ミーゼス』春秋社, 198–199頁)
- 68) Hayek, F.A. *Ibid.*, p. 66. (『カール・メンガー』164頁)
- 69) Hayek, F.A. *Ibid.*, p. 66. (『カール・メンガー』164頁)